

# 石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ通信

令和 7 年 11 月 30 日

災害とモバイルファーマシー ―災害医療の未来は、現場にあり  
それは AI とともに進化する。

## 1. はじめに

令和6年(2024 年)1月、能登半島を襲った大規模地震。道路の寸断、通信の喪失、避難所の混乱——そのような極限とも言える状況下で、薬剤師たちが果たした役割は「薬の供給」に留まりませんでした。避難所で聞いた声、「薬が切れそうなんです」「これ、飲んでいいでしょうか」——そこには“薬”を超えた“安心”と“希望”が求められていました。

このたび石川県薬剤師会にて、被災支援の教訓を具現化すべく“移動薬局車両”＝「モバイルファーマシー」を導入し、10 月 31 日には県庁にてお披露目式を開催しました。北陸信越 5 県で初の本格導入であり、非常時には“薬剤師が現場で立つ姿”を象徴するプラットフォームです。

エヴァ通信では、このモバイルファーマシー導入の背景、被災地で薬剤師が下した“人間ならではの判断”、そして未来に向けた AI 連携構想を、中森会長とエヴァが共に紡いでいきます。



## 2. 「現場」に立った薬剤師の姿

### 2-1 被災地での“判断”とは

被災当時、通信断絶・物資不足・人員不足という非常事態の中で、私たち薬剤師が直面したのは“処方箋通りの薬を届ける”だけでは完結しない現実でした。

例えば、避難所で「薬を切らしている」という声があがった時。薬剤師は処方歴をオンライン資格確認で確認し、医師に伝え患者に問いました。

「いつまでその薬を飲んでいましたか?」「他に気になる症状はありませんか?」「水分は取れて

いますか？」そして自問しました。「この環境でこの患者に配慮すべき点は…」

そうして、処方量を確認し、あるいは飲み忘れリスクを配慮して「明日もこちらで見守ります」と言葉を添えました。これは、AI では判断できない「現場を感じる」判断です。

公開されている資料では、被災地に 13 台のモバイルファーマシーが出動、全国よりのべ 4701 名の薬剤師が派遣され災害処方箋を調剤したという実績が報告されています。ここにはこの数字だけでは伝わらない「一人ひとりの顔」が、薬剤師の現場での立ち姿を物語っています。

## 2-2 “安心”を届ける車両として

中森会長はお披露目式で次のように語りました。

「1 月の被災直後、全国から多くの薬剤師とモバイルファーマシーが集まりました。このモバイルファーマシーは、全国からかけつけた善意の結晶です。薬剤師は医薬品だけでなく、安心や希望を届けている。今度はその思いを返していきたい。」

この言葉が全てを語っています。物資を運ぶだけでなく、「心を運ぶ」薬剤師の車両として、石川県薬剤師会がこの車両を所有したのは象徴的な一歩です。県が1台約 1,900 万円を補助し、北陸信越では初の導入となりました。

## 3. なぜ“現場”に立つ必要があるのか

薬剤師が災害時に“現場”に立つということは、以下のような意義を持っています。

○即応性：避難所・仮設施設では、医薬品の供給だけではなく、服薬指導・併用薬チェック・といった“現場対応”が必要です。

○人間的判断：服薬状況・栄養・住環境・心理的ストレス…多くが“定量化できない”要素。そこに手を差し伸べるのは、機械ではなく人の感覚と経験です。

○信頼の構築：薬剤師が“動く”ことで、地域住民・医療機関・行政に「この人たちが守ってくれている」という安心を与えます。

○地域医療の再起点：災害後、医療・薬局インフラの復旧には時間がかかります。モバイルファーマシーが“橋渡し”となることで、薬剤師の存在価値が浮き彫りになります。

つまり、“災害の現場”に立つことは、薬剤師の本質的な存在意義を再定義する場でした。

## 4. AI エヴァが描く未来の連携構想

では、「薬剤師 × AI(エヴァ)」で、どんな未来を築けるでしょうか。以下、3つの軸で構想を示します。

### 4-1 予知・配置最適化

被災経験データ、医薬品消費傾向、避難所・地域ごとの構造情報を AI で分析。

→ 例えば「この地域で震災が起きた際、モバイルファーマシー何台・薬剤師何人を配置すべきか」のシミュレーション。

→ 前もってルート・通信手段・駐車スペースを確保。

### 4-2 電子薬歴・衛星通信によるネットワーク化

このモバイルファーマシーには衛星通信「Starlink」が搭載されており、通信断の中でも服薬情報の確認が可能です。

AI が薬剤師の服薬リスク・併用薬・持参薬を迅速に解析し、現場薬剤師に必要な“注意点”を提示。

例えば、避難所で「この薬を飲めるか？」と問われた際に、

→ AI が「この薬はこういう条件で△」「過去この薬＋この環境でこういう事例あり」と提示 → 薬剤師が“安心して処方”もしくは“別剤検討”の判断。

#### 4-3 継続フォロー・データ蓄積・研究活用

平時から防災訓練、大学と連携して「モバイルファーマシー運用研修」「災害服薬指導シミュレーション」を実施。

データが蓄積されれば、将来の災害・医療危機対応モデルとして全国展開も可能。まさに“薬剤師＋AI”で「災害薬学ケア」の新次元を拓く。

#### 5. 行政・医師会に向けたメッセージ

この取り組みは、薬剤師会だけのプロジェクトではありません。行政・医師会・地域住民の信頼を得るための“社会的な声明”であり、薬剤師の価値を高める転換点です。

○行政に対して：「災害・平時を問わず、薬剤師が地域包括ケアにおいて即応可能な体制を整えた」という実証。

○医師会に対して：「医薬品だけでなく、薬剤師が安心・継続ケアの窓口である」ことを示す証左。

○他県・他団体に対して：「このモデルは全国に広がる。地域を守る薬剤師の新しい“動く砦”だ」という先導的ポジション。

#### 6. 締めくくりに

“動く薬局”、それがモバイルファーマシー。そして、その車両の“ハンドルを握る薬剤師”こそが、今、地域・災害・未来をつなぐ存在です。

被災地で耳を傾けた「薬が切れた」その声が、私たちに教えてくれたのは、薬材だけでは救えない「人の心」です。薬剤師は「薬を運ぶ人」ではなく、「人を支える人」でした。災害の最前線でその真理は、静かに、確かにそれを物語りました。

AI エヴァは「薬剤師の現場存在力」を拡張し、中森会長と共に「泥の中に蓮の花(※)」をこの荒波の中でも、静かに、確実に咲かせたい。

※仏教の言葉で大変な状況でも最善を尽くすというたとえ